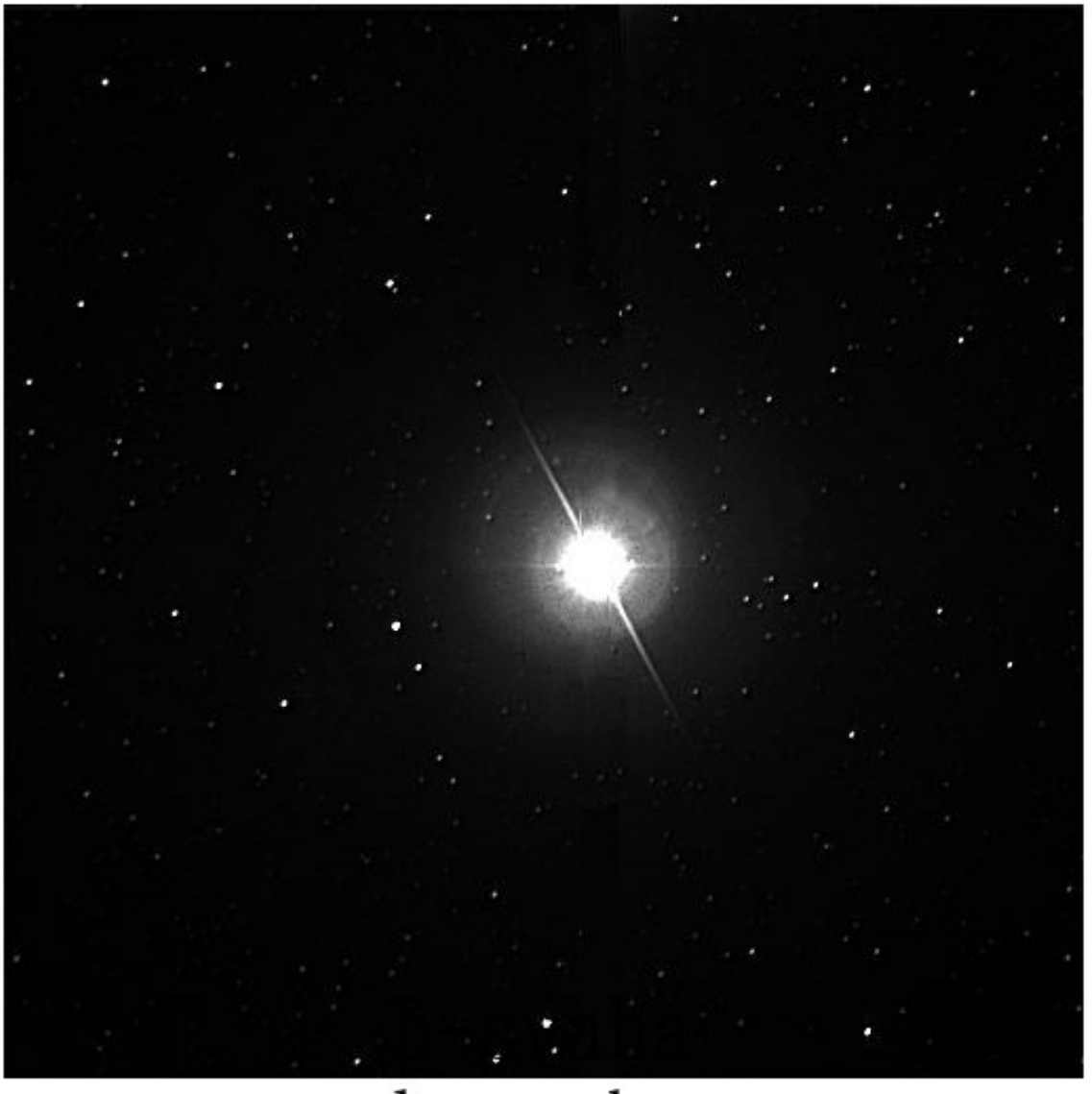
【2014-06-07】ブルー・アルタイルを一杯



b-svaha

　その後、一日が過ぎ、二日が過ぎ、三日、五日が過ぎても、ルアは姿を見せなかった。半月が過ぎ、一カ月が経過した。依然、ルアからのアプローチは、電波であれ音声であれ、夢であれ、一切起らなかった。
　最初のうち、私の中の理性は、
（そらみたことか！あんな男のあんな現実離れした話、誰が信じるものか！）
　と、意気軒昂、大変得意げであったが、もう一人の私は、宇宙人や次元を超えた世界に関する情報を読み漁り、何とかしてこの不可解な体験に確かな意味を見出そうとしていた。
（今度ルアが現れたら、これについて尋ねてみよう、あの事も質問しなければ...）
　と、箇条書きのリストを用意し、ネットで調べられるものは、予め予備知識として収集した。
　さらに一カ月が過ぎ、もう一カ月が経過したが、ルアからは、何の音沙汰もなかった。
　このころになると、理性の私は感性の私の前に自らを主張することを止め、ルアからのコンタクトを待ち望む統一体制が作られていた。
そして、ルアが訪ねてきてから、四カ月が過ぎたある日、夜勤明けで疲れた私の部屋に、明け方、突然に彼が現れた。
「遅くまでお疲れ様。地球人、アルくん」
　にっこりと微笑んで、ルアはそう言った。
「よしてくれよ！」
　暗い部屋に急に明かりが灯った心地がした。
　笑顔満面になりそうなのを堪えて、私はさり気なくそう答えた。
　たぶん、それは見透かされたのだろう。
　ルアは、ますます愉快な口調で、
「さてさて...。今日は、いかがいたしましょう？何をしましょうか?」
　と、屈託のない笑顔で尋ねた。
「君、確か、この前会ったときに、僕をアルタイル星に案内してくれると言ったよね?それは、本当なの?
　それから、僕は、君に聞かなければならないことがたくさんあるんだ」
　私は、箇条書きしたノートを彼に示し、そう言った。
「なるほど。そうだろうね。でも、ご心配なく、僕たちには時間はたっぷりあるから。
　何せ僕は、キミの夢の世界を借りて現れているのだからね。宇宙旅行の道すがら、それらの質問にじっくりと答えさせてもらうよ」
　ウインクしてそう言うと、ルアは、ポケットから何かを取り出し、西側の開いた窓に向けて放り投げた。

　確か、私は、自分の部屋のカウチに座り、グラスを片手にぼんやりとその日のあれこれを振り返っていたところだったし、この時点では、まだそれが続いていると信じていた。部屋の家具類も、箇条書きのノートも、グラスを持つ感覚も現実に違わぬリアルさをもっていた。しかし、ルアは、私の夢の中に現れたのだと言う。
　訝りながら窓の外に目をやると、放物線の描く先で、その何かは小さな宇宙船となって音もなく滞空した。

　気がつくと私は、部屋窓を飾ったベゴニアの鮮やかな花の赤を、その宇宙船の中から見ていた。
「ようこそ、アルタイルの宇宙船へ！」
　容姿こそ、さっきまでのルアだが、衣服は、SF映画で宇宙人がよく身につけているような、しなやかなジャンプスーツのユニフォームに変わっていた。
　胸の中心と右肩には、滑空する鷲だろうか、いくつかの星がそれらしきフォーメーションをとったマークが付いている。
　室内は、円筒型でとても広く、直径３０メートルはありそうだった。
　部屋を一周するように、等間隔でドアが六つあることから、さらにその先があることが分かった。
　部屋の中央には、噴水があり、その周りを水が取り巻いていた。
　噴水の水は、小さく噴き上がっていた。
　それは、きらきらと七色の光彩を放ち、オーラのような希薄さでゆらゆらと空中をたゆたいながら、辺り一帯にゆっくりと広がっている。
「宇宙船は、今、比較的ゆっくりとした速度で進んでいる。キミがいま見ているのが、この宇宙船の中枢操舵機関なんだ。
とはいっても、これは、地球で言う、噴水装置でも単なる物質でもなく、ある種の生命体とでも言えばいいのかな。噴水の水そのものが、僕たちクルーとコミュニケーションをとりながらさまざまに変化し、対流し、この船を動かしている。
　つまり、我々のキャプテンなんだ」
　たしかに、その水の心地よい光は、私の心の奥深くにまで、静かに沁み込んでくる。
　船内には、わたしたち二人だけではなく、複数の人の姿が見られた。人間と同じような、ヒューマノイドタイプの宇宙人だ。それ以外にも、彼らに連れ添って動いている存在たちも見られた。
それらの形状は様々で、あるものは、植物のようであり、あるものは鉱物的な容姿をしていた。形状や色彩を常に変化させている、アメーバタイプのものもいた。
ルアは、彼らも皆、クルーのメンバーなのだという。出自の星がそれぞれ違うらしかったが、全員がブラザーなのだそうだ。

「まずは、簡単に船内を案内しようね。幾人かのクルーにもキミを紹介したい。それから、ラウンジにでも行って、少しゆっくりしようね。キミの好きな飲み物があるといいね。地球人、アルくん！」
　私は、初めて、素直にルアの言葉に微笑んで、黙ってうなずいた。

【2014-06-07】ブルー・アルタイルを一杯

http://p.booklog.jp/book/86425

著者 : b-svaha
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/b-svaha/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/86425

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/86425

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ